

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
しらや みちこ 白谷 岐子 (旧姓 永江)	女性	11歳	豊橋市小池町 (東栄町三輪)

「祖国の土を踏めなかった母 ～ 上陸前日に…」

取材日：2025. 3. 14

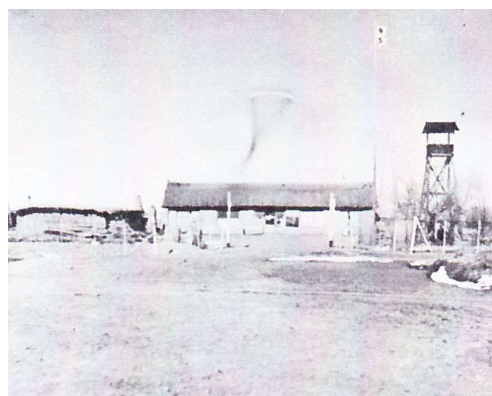
○ 国民学校の校長として満州へ

私の父（永江土岐次）は東栄町で校長をしていましたが、なぜ満州へ行くことになったのかはよく分かりません。当時は、国策で多くの人が満州へ家族ぐるみで移住し始めていました。東栄町からは最終的に32軒も行きましたから、子どもたちを教える教師が必要になり、父が選ばれて行くことになったと思います。私たち家族は教員住宅にいましたので、家や田畑を処分することもなく、準備は比較的楽だったと思います。父が出発したのは、昭和15年だったと思います。当時の長岡駅（現東栄駅）から、「万歳、万歳」と歓呼の声に送られて出発したのをよく覚えています。

○ 三合屯の学校と暮らし

昭和16年、小学校2年生になって私は母と満州へ渡りました。私たち家族は、三合屯の本部部落に入りました。本部の周囲には深い堀があり、その内側に本部や学校、住居がありました。姉は女学校を卒業してから満州に来ましたが、病院に勤めたため、私たちと合流したのは終戦後のことです。

国民学校は、古くて小さな建物でした。本部の敷地内にあり、私たちには近くて便利でしたが、遠い部落の子たちは寄宿舎に入りました。開拓団の人たちは出身地ごとに、海老部落とか田口部落など、それぞれに出身地の部落をつくっていました。山のない平原で本部から部落が見えましたが、かなり離れていたのです。子どもたちは寄宿舎生活になったのです。土曜日の午後になると迎えに来てもらい、日曜日の夕方には寄宿に戻っていました。



東三河郷開拓団本部 提供:夏目幾代氏

昭和17年になって東栄町の伊藤政市さん（経理担当）や林先生の家族も本部に入りました。政市さんの娘の美穂さんは私と同級生で、私たち家族と同じ家屋で、台所や風呂場をはさんだ隣同士でした。私は美穂さんとすぐに仲よくなり、いつもいっしょにお風呂に入りました。夕方には飯ごうを持って近くにある牛車

へ絞った牛乳をもらいに行くのが二人の仕事でした。美穂さんとはとても気が合い、苦勞を共にしたこともあって、今でも電話で連絡を取り合って、兄弟とは違った強い絆を感じています。

国民学校は、昭和19年4月にレンガ造りの立派な建物になりましたが、昭和20年の7月には戦況が悪くなり閉鎖されてしまいました。私の同級生は、一番多い学年で7、8人いましたが、友達と会えなくなり、勉強もできなくて悲しかったです。

私の父は校長をしていましたが、勉強のことをとやかく口出す人ではなく、分からないことは兄が教えてくれたので、いつも優しく見守ってくれました。



【開拓団の小学校】
宿舍で勉強に励む子どもたち
「満州帝国最後の日」より

○ 終戦で逃避行が始まる

終戦後、それまでの生活が一変し三合屯にいられなくなりました。昭和20年10月、三合屯から東陽開拓団（熊本県）へほとんどの人が移動しました。夜の移動で野宿しながらで大変でした。そこには5ヶ月ほどいましたが食料が少なくなり、病気がまん延したり、匪賊に襲われたりするようになりました。

私の姉は年頃でしたので、母が娘の顔をしているとねらわれるからと、顔に墨をぬり、髪も短く切って男のように見せかけました。匪賊が来た時には、知人の汚くした子供をおぶってごまかしたことを覚えています。そのおかげで襲われることはありませんでした。母がけんめいに守ってくれたおかげです。

昭和21年2月頃、伊藤政市さん家族といっしょに新発開拓団（山口県）に入りました。滝川辰雄さんの記録では160人あまりだったそうです。新発開拓団の人たちは先に避難していたので空き家になっていました。私たち家族は、市川さん、橋本克巳さん家族と同じ家にいました。食事は、共同で料理を作ってもらっていました。そこでは連れてきた犬が殺されて出汁にされました。それほど食べものがなかったのです。それを私たちは飯ごうを持ってもらいに行き、それぞれの家で食べたのです。最後に、兄が飼っていた犬が殺されました。かわいがっていた犬が殺されたものだから、兄は狂ったようにわんわん泣いて暴れたのをよく覚えています。

新発でも匪賊に襲われるようになり、開拓団の人たちはそれぞれの判断で移動するようになりました。私の家族は、少しでも内地に近いチチハルをめざしました。夜通し歩いて野宿もしました。逃避行の途中、赤子が泣くと匪賊に見つかるからと、赤子の口を塞ぎ、殺してしまったお母さんがいました。逃避行は続くの

で、「赤ちゃんを置いていきなさい！」と言われましたが、そのお母さんは遺体を離そうとせず、ずっと泣きじゃくっていた姿が忘れられません。本当にかわいそうでした。みんな辛かったと思います。

その頃、私の母は身重でしたのでどれほど大変だったことかと思えます。



地獄の逃避行 向井久美子「夕焼けの大地」より

○ 蒙古人の親切

逃避行の途中、私たちはそれぞれに蒙古人の家に助けを求め、しばらくお世話になりました。ある時、その家の子供が亡くなりました。亡くなった子供はお墓に埋葬されず、木にぶら下げられました。動物に食べられれば成仏できるという風習でした。私の兄が同じ年の蒙古の子と仲よくなり、いっしょに見に行ったそうです。そのことを何度か話してくれたので、よく覚えています。蒙古部落では、私たちをととても大事にしてくれました。私たちも食べさせてもらう代わりに、できる仕事をさせてもらいました。父は、牛車で毎朝フンの片づけをしていて、牛に蹴られて腰を痛めたことがありました。

母はお腹が大きくて大変そうでしたが、台所を手伝っていました。いろいろな料理を作って気に入られたようです。そして、その蒙古人の家で弟の拓を産んだのです。このことが母の体にとって大きな負担をかけることになったようです。蒙古の人たちはとても親切でいい人たちでした。私たちをそこから船に乗せて、チチハルまで送ってくれたのです。まだまだ長い道のりでしたから、どれほど助かったことか。感謝の言葉もありません。

○ チチハルからコロ島へ

チチハルでは収容所の大きな建物（吉野屋？）に入りました。そこでは発疹チフスがまん延していて、毎日のように避難してきた人が亡くなりました。新発開拓団でいっしょだった橋本克巳ちゃんは、家族がみんな亡くなって一人ぼっちになっていました。私の家族では、私だけ発疹チフスにかかりましたが、どうにか命をつなぐことができました。運がよかったですね。でも髪の毛が全部抜けてしまい、いつも風呂敷をかぶっていました。父の話では、人が亡くなると大きな穴の中へ捨ててきたそうです。死体はムシロのようなものにくるんで、交代で捨てに行ったそうで、明日は家の家族かもしれないと思ったそうです。お前はよく生きてくれたなと何度も言われました。

コロ島へ向かう列車は、囲いのない板張りの貨車でした。父親たち大人は貨車の端っこにすわって、まん中へ女子供が座って振り落とされないように手をつないでいました。トイレは止まるたびに行くように言われ、みんな野原で用足しをしました。途中で亡くなった人は野原へ捨てられたようです。

○ 上陸前日の母の死

やっと引き揚げ船で日本へ帰る見通しが立った時、悲劇が待っていました。美穂さんのお母さんは、船に乗る前の日に亡くなりました。(伊藤哲人さんの体験談参照)

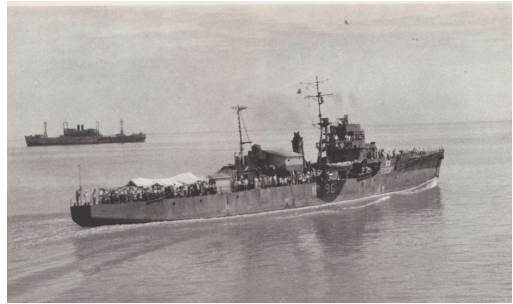
私の母が亡くなったのは、明日、博多港に上陸するという日でした。母の体は衰弱して引揚げ船 飯山辰雄「引揚げの慟哭」より
いました。蒙古人の家で弟を産んでから体が弱くなっていきました。食べるものが十分なくて栄養不足、逃避行で無理をして歩くので、乳も出なくなっていました。弟は、乳の出る他のお母さん方に少しずつ飲ませてもらって命をつないでいました。弟はみんなのおかげで生かされたのです。本当にありがたいことでした。今も東京で元気でいて、時々電話をくれますよ。

コロ島からの引揚げ船では、船底にいました。海軍の払い下げの古い船で、床に板が張ってあるだけでした。東シナ海から玄界灘に入るまで5、6日かかったと思います。船底は激しく揺られ、床にしがみつかないと体がゴロゴロ転がされました。伝染病の人がいたためか、博多の沖で1週間ぐらい停泊して待たされました。その間にも、母の容体がどんどん悪くなっていきました。船の中では次々と亡くなる人が出て、水葬にされたと聞きました。水葬っていうのは海に捨てられることです。その時、同じ本郷出身の若い女性も瀕死の状態でした。

そして、いよいよ明日上陸できることになり、博多湾に入りました。その日の夜、父が世話役で上陸の相談で話し合いに行っていた時でした。急に母が息を引き取ったのです。兄と姉と私の3人で看取ることになりました。姉は、その時、「父がいなくてよかった。いたら、どうかなってしまったかもしれない。」と言いました。日本に帰ることを夢見て、どんなに辛いことにも耐えてきたのに、何ということでしょう。よりによって明日、上陸できるといううれしい日に亡くなったのです。母は38歳でした。

息を引き取ると、すぐ甲板に上げられました。国防色の毛布にぐるぐる包まれて縛られました。私たちは、甲板の母の遺体の側で一晩過ごすことを許してもらいました。翌朝、上陸する時、母の遺体が船の後ろからスーッと下ろされるのを見ました。

ただ、沖で亡くなった人はみんな水葬にされましたが、私の母は港に入る直前だったので、博多港に上陸後、火葬にされました。父がお骨を受け取りに行きましたが、お骨をいただけたのは私たちだけだったと聞かされました。船で最後に亡くなったことで、海に捨てられな



【水葬】 夫が沈められた海面を遺児を抱いて見つめ、いつまでも離れようとしない夫人
飯山辰雄「引揚げの慟哭」より

かったことはせめてもの救いでした。それでも、あと一日生きてくれたら、もう少し早く上陸させてくれれば、お医者さんの手当を受けていれば助かったかもしれないと、返す返す悔やまれました。母のように瀕死だった本郷の若い女性は、上陸した時に息があり、すぐに手当てをしてもらって元気になったのです。ですから、何で母は、何で……と思わずにはられませんでした。

母は息を引き取る寸前にこう言いました。「お父ちゃんの顔に、泥をぬるようなことは絶対しちやあいかんよ。」「世間様に後ろ指をさされるような悪い人になってはいけないよ。」と何回も繰り返しました。今でも母の声が聞こえてきますよ。姉には「拓を頼むよ。」と言っていました。これが遺言でした。どんなにか口惜しく、心残りだったことかと思えます。

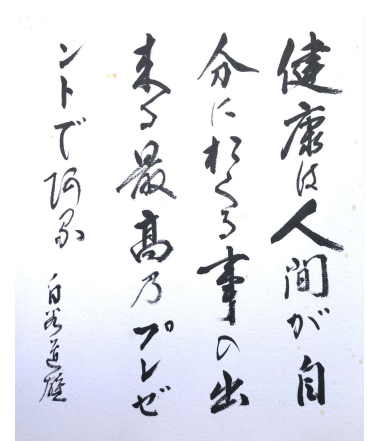
博多からは、引揚げ列車で名古屋まで行きました。開拓団の人とは名古屋で別れ、それぞれに帰りました。私たちは蒲郡の父の妹の家に泊めてもらい、翌日、本郷の父の実家へ帰りました。

終戦前から帰国した昭和21年10月までの1年半、開拓団の子は全く勉強できませんでした。満州から田口へ帰った子は1年下の学年に入ったと聞きましたが、私と美穂さんは小学校2年生で満州に渡って同級生もいましたので、先生に頼んで同じ学年に入れてもらいました。その時はまだ本郷国民学校のままでしたので、3月までは高等科の1年生だったわけです。先生は、「運動場が畑になっていて、他のみんなも勉強はあまりできなかったから頑張れば大丈夫だ。」と励ましてくれました。この頃はまだ病気の影響で髪の毛がなくて困りましたが、本郷の父の実家が美容院だったので、カツラをかぶせてもらって学校へ通いました。栄養失調のためか色が黒かったので、男の子たちからかわれました。私はその子たちに勉強で負けてたまるかと、必死に頑張りましたよ。

昭和22年の4月から6・3制の新制中学校となったので、2年生から中学生になりました。父が復職して古戸中学校に勤めることになったため、私も転校して古戸中学を卒業しました。

父はずっと教員住宅で過ごし、奈根で定年を迎えました。穏やかで優しい人で、書をたしなみ、よく色紙に書いてくれました。国策に協力したばかりに満州では苦労しましたが、96歳の長寿を全うすることができました。

私は、辛い体験を通して、助け合うことの大切さを学んだように思います。それが人の絆の強さになるんだと思いますよ。でも、人を不幸にする戦争だけは、どんなことがあってもしてはいけませんね。



父が生前、夫に残した色紙

(取材・文責) 八名郷土史会 安形茂樹